

その後、しばらく県外に出て木遣りとは離れていましたが、地元に戻り経験した御柱で、

大祭の本番で、大人と一緒に木遣りを鳴けば、目の前の大きな大木が一気に動きだし、その様子があまりに圧倒的で、強い感銘を受けました。



『もみの大木を切り倒し、柱まで曳きつけ四隅に建てる。』文字にしてみると大変単純なお祭りですが、この『もみの大木』は神となります。



伐採・御柱への思い



四区伐採長 宮原 宏人

平成二十七年五月十二日、次年に行われる諏訪大社御柱祭に向けて用材の伐採が執り行われました。

私は今回の伐採で四回目の参加となります。下諏訪町第四区が担当する秋宮三の御柱の伐採長という重責で、身の引き締まる思いでありました。

伐採の作業は昨年五月の御柱本見立てより実質的に開始されました。今回の御柱用材の立地条件は、過去三回参加した伐採の中では一番の厳しい条件でありました。木の重心が谷側に大きく偏心し、そちら側には県道七島八島線とそれに並行して電



線が張られていました。また隣接する樅の木と上部において枝からみもありました。地区の長老・伐採作業経験者などと相談し伐採作業の労力は多くなるが候補木に対して一番ダメージが少なく安全な山側に伐倒方向を限定し、その条件に必要な作業を実施することとしました。



昨年十月に作業に必要な諸手続きを終えて、伐倒方向と反対方向にある御神木の枝下ろしと隣にある樅の木との枝からみの解消作業を二日間にわたり行いました。これにより今年の作業が格段に容易となりました。今年になり二月より伐採委員会が立ち上がりました。今回の伐採作業の困難さや日頃より大径木の伐採作業経験者は皆無という条件のなか、伐採奉仕員を技術継承のため前回の倍の四十八名としました。

引装置等全てに控えを装着して、ダブルとし伐採作業にあたりました。御柱を寝かす方向は若干予定方向と異なりましたが、無事に作業を終えることができたの荷がおりました。伐採後、年輪による樹齢確認をしたところ、二〇〇年でした。段取り八分と言いますが、準備より安全な伐採のために献身的に協力して頂いた区民の皆さんと二〇〇年かけて御柱用材を育ててくれた東俣の自然に感謝し、御柱が無事に大社に引きつけられるように望んでいます。

奥山の大木 里に下りて 神となる



下諏訪木遣保存会 武居 晶子

私と御柱の関わりは、小学校のころ、近所の仲間たちと一緒に公民館で木遣りを始めたことでした。

「あく私のやりたいことはこれだ!!!」と気が付き、現在に至っています。

当時、女性の木遣り衆はまだ珍しい存在で、どちらかというのと男性色の強い世界でしたが、周囲の方々の励ましや応援を頼りに思い切って飛び込むことにしました。

最初は、木遣りの師である方から、「お前の木遣りは、箸にも棒にもかからねえ」と練習の度に直され、自信を無くす時もありましたが、御柱が近づくと毎晩練習を重ね、喉を鍛えました。

その甲斐あってか、平成二十二年の大祭で秋一の柱を氏子の皆様とご一緒に動かされた時は本当に嬉しかったです。

持つて参加することではないかと考えております。

私にできることは、多くはありませんが、木遣り衆の皆様と一致団結することはもちろん、御柱に携わる役員の皆様、また氏子の皆様と心を一つにするために、精一杯の木遣りでのご奉仕ができればと思います。

いよいよ来年となりました平成二十八年の御柱祭が、皆様の心に残る素晴らしいものとなりますよう、心から願っております。